

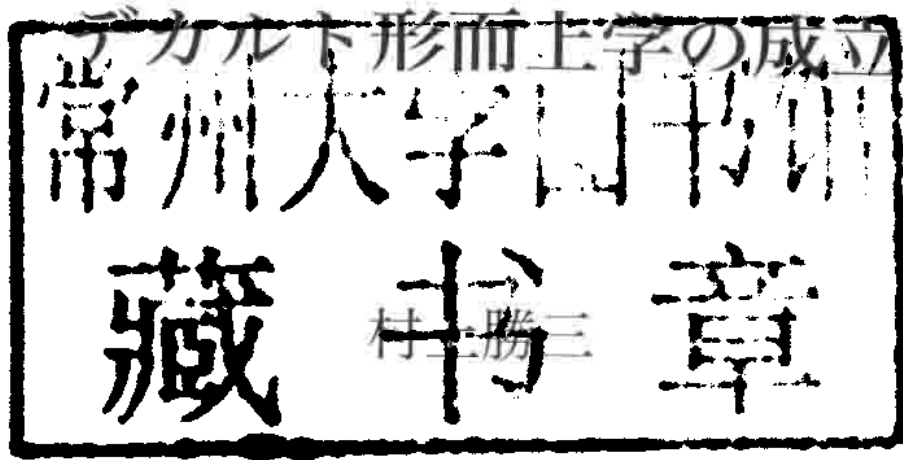
デカルト形而上学の成立

murakami katsuzo

村上勝三

R e n é D e s c a r t e s





講談社学術文庫

村上勝三（むらかみ かつぞ）

1944年生まれ。東京大学大学院博士課程満期退学。東洋大学文学部教授。文学博士。専攻は哲学。著書に『観念と存在——デカルト研究1』、『数学あるいは存在の重み——デカルト研究2』、『新デカルト的省察』、共著に『現代デカルト論集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』、『真理の探究』、『西洋哲学史Ⅲ』など。



定価はカバーに表示してあります。

けいじ じょうがく せいりつ
デカルト形而上学の成立

むらかみ かつぞ
村上勝三

2012年10月10日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 豊国印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

© Katsuzo Murakami 2012 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R]〈日本複製権センター委託出版物〉

ISBN978-4-06-292136-7

目次

第二版序文	3
読者への序言	5
第I部 先入見の排除	19
第一章 「形而上学の小篇」と「永遠真理創造説」	20
第一節 一六二九年と一六三〇年のデカルト思索史上の位置	20
第二節 三〇年の四つの書簡の検討	26
一 第一書簡の解説	26
二 第二、第三、第四書簡の吟味	33
第三節 「形而上学の小篇」について	38

第二章 三〇年の永遠真理と形而上学…………… 48

第一節 永遠真理についての三〇年の思索の核心 48

第二節 「形而上学の小篇」と「永遠真理」と自然学 60

一 「永遠真理創造説」と自然学の基礎づけ 60

二 『宇宙論』「第七章」の問題 63

三 『哲学の原理』「第一部」「第二二項」から「第二四項」まで 65

四 「方法序説」「第五部」冒頭箇所について 68

第三節 「永遠真理」の行方 80

第Ⅱ部 感覚から観念^{イデア}へ…………… 91

序論 「観念」への歩み 92

第一章 『宇宙論』における「観念」…………… 93

第一節 「光論」と『規則論』との非連続性 93

第二節 「人間論」について 98

第三節 「人間論」における「観念」 101

第二章 「屈折光学」における「観念」…………… 109

第一節 類似性の否定 109

第二節 類似性からの解放 112

第三節 「観念」と「感覚」 117

第三章 「方法序説」「第四部」における「観念」説…………… 122

序論 「第四部」の構成 122

第一節 疑い 124

第二節 心についての認識 128

第三節 一般規則 132

第四節 神についての認識 135

第五節 数学の証明と形而上学の論証 140

第六節 〈第二部分〉の構成 142

第七節	思いの仕方としての想像力および観念	144
第八節	すべては神に由来する	145
第九節	理性	150
第一〇節	「第四部」的「観念」説	154
第一一節	『省察』に向かつて	157

第Ⅲ部 形而上学の成立……………169

序 論 『省察』について……………170

第一章 疑いの道……………180

第一節 「第一省察」の構図 180

第二節 疑いの始まりと疑うということ 183

第三節 感覺的意見への疑い 184

第四節 自然学的意見への疑い 188

第五節 数学的意見への疑い 192

第六節 神についての意見への疑い 197

第二章 人間精神について…………… 209

第一節 「私」の「あること」と「実在すること」 209

第二節 「私」の「何であるか」 213

第三節 自己知から想像力を切り離すこと 217

第四節 思うものとは何か 219

第五節 蜜蠟の例 (exemplum 178.19-20) 221

第六節 物体知と自己知 225

第三章 形而上学の立論…………… 238

第一節 何処から何処へ 238

第二節 観念の第一の途 243

第三節 観念の第二の途 250

第四節 第一の神証明 261

第五節 第二の神証明 274

第六節 本有観念 284

第四章 真と偽の成り立ち…………… 294

序 論 「第四省察」を巡る先入見的思想の排除 294

第一節 多くのこととごく僅かなこと 301

第二節 いつそう私へと 306

第三節 私の誤りは何処から生じるのか 313

第四節 意志を正しく用いる 321

第五節 欠如とは何か 323

第六節 誤らないという習慣 330

第五章 「^{イデア}観念」論としての形而上学…………… 344

第一節 「第一哲学」と「形而上学」 344

第二節 「^{イデア}観念」論の意義 352

第三節 無限なるもの 356

引用文献一覧	363
あとがき	371
用語索引	383

デカルト形而上学の成立

村上勝三

講談社学術文庫

第二版序文

本書の初版は一九九〇年に『デカルト形而上学の成立』として勁草書房から出版された。この度、講談社学術文庫として出版することになり二二年の隔たりを超えて手を加えることになった。改良されたのは主に次の三点である。第一に、初版出版後に批判を受けて修正を施した点、第二に、その後に提起された解釈の重要性を考慮して付け加えた点、第三点は、訳語の変更である。訳語の変更のなかで大きいものは《cogitatio》に「思ひ」を当て、「思惟」を当てなかつたこと、《extensio》に「広がり」を当て「延長」を当てなかつたことである。その理由はわれわれの日々直面する最も頻繁な知覚現象の形式が「広がりを使う」と表現されるからである。「延長を思惟する」という表現は抽象的であり、だからといって精確さをもっているわけでもない。第一点と第二点については実地に確かめていただきたい。内容と別に文章の律動についても工夫を試みた。初版は二つの律動をもった文章で書かれていた。短く畳みかけるもの、長くのたうち廻るもの。第二版ではその中間として、落ち着いて次に促す律動を付け加えるように心掛けた。これらの変化に対して、解釈を構成する太く引かれた軸は一九九〇年から二〇一二年まで揺らいではない。

読者への序言

本書はデカルト形而上学がどのような道を辿って構築されたのかということを解明する。

出発点に一六三〇年の四つの書簡を設定し、「観念」^{イデア}についての捉え方の変容を展開軸に据えながら、『省察』「第四省察」の判断論まで、後ろから見れば、数学と物理学の基礎づけに入る前まで、デカルトの思索の跡を追い、デカルト形而上学の根づくところを明らかにする。一六三〇年の四つの書簡に記されている一六二九年の「形而上学の小篇」と「永遠真理創造説」をデカルト形而上学成立に向けての出発点に据えるのは、ここに晩年まで受け継がれて行くデカルト形而上学の種子が播かれていたからである。われわれの解釈に固有な視点は、「観念」^{イデア}把握の展開としてデカルト形而上学の成立を捉えるという点にある。その展開の一つの到達点として『省察』「第三省察」、「第四省察」に繰り広げられるデカルト形而上学の獨創性が立ち現れる。デカルト形而上学はフランチェスコ・スアレス (F. Suárez, 1548-1617) の『形而上学討究』 (*Disputationes Metaphysicae*, Salamanca 1597/Olms 1965) とクリスチャン・ヴォルフ (Ch. Wolff, 1679-1754) の『第一哲学ないし存在論』 (*Philosophia prima, sive Ontologia, methodo scientifica pertractata, qua omnis cognitionis humanae principia continentur*, Frankfurt et Leipzig 1730/36/Olms 2011) との間に位置する。この

両側において見出されず、デカルト形而上学に見出されるのは形而上学における「私」の「第一性」である（この点については次の拙論を参照。「デカルトと近代形而上学」『西洋哲学史Ⅲ』講談社選書メチエ、二〇一二年六月）。「私」から上り詰めて開かれる形而上学は結局のところ一七世紀という特有な時代を超えて受け継がれることがなかったのである。

次に、予め本書の構成について述べておく。本書は三部からなる。「第一部」の主たる目的は、『省察』を読み解く上でのきわめて強力な、既に先入見にまでなっていると考えられる解釈を斥けることにある。第一に、いわゆる「永遠真理創造説」の「永遠真理創造説」という括り方をすることによって大事な論点が隠れることになる。この点を明らかにし、「永遠真理創造説」と呼ばれる思索の要点を示す。第二に、このテーゼと「形而上学の小篇」とを道筋の異なる思索として分離することを批判的に検討する。この二つが「第一部」におけるわれわれの結論の一部になる。しかし、斥けるに際して重要なことは批判にあるわけではない。批判することを通して、デカルト哲学に対する見方が自ずと醸成することが肝要なのである。「第二部」において、われわれは、デカルト的「観念」把握の展開過程を追いつつ、この見方にかたちを与えることに努める。そのために『宇宙論』における、「屈折光学」における「観念」についての把握を明らかにするであろう。さらに「方法序説」「第四部」における「観念」説の解明とともに、その形而上学的思索の途上性をも提起しつつ、デカルト哲学に対するわれわれの視点である「観念」についてのデカルト的把握にかた

ちが与えられるであろう。かく準備を整えた上で、「第三部」において『省察』を「第一省察」から「第四省察」へと読み解き進める。読み解き進めるなかから「第三省察」と「第四省察」とがデカルト「第一哲学」の核心としての形而上学であることの意義が明らかになるであろう。

デカルト哲学の核心である形而上学をわれわれは「観念」^{イデア}論として捉える。このことの成否は、右の視点がテキストに支えられていることはもちろんのこととして、二つの面から測られるであろう。すなわち、デカルト哲学の解釈としてどれほどの妥当性と普遍性を有するのかということ、および、哲学研究にどれほど寄与しうるのかということである。後者の面はデカルト哲学の大きさを何処までどのように開き出せるのかということに源泉をもつと言つてよいであろう。デカルト哲学ほど数多くの批判に晒され続けた哲学があつたであろうか。幾多もの問題がデカルト哲学を批判することを通して哲学的に深められてきた。批判される側が堅固でなければ、批判の刃は鈍るばかりである。デカルト研究者の役割の一面はその点にある。すなわち、デカルト哲学を堅固なすがたで提示し続けることである。もう一面は、その解釈の営みがそのまま哲学的探究であるという点に存する。本書が、デカルト哲学を堅固なすがたで提示しているか否か、かつまた、哲学的探究という深みにまで思索を彫琢しているか否か、これを決するのは著者ではない。著者は、著者であるへわたくし〜が、デカルト哲学における「私」の歩みをへわれわれ〜として辿るべく努めるばかりである。